

# 「中等教育日本語の教え方 A2 (ベーシック) 自習コース」の開発

ーインドネシアにおける「JF にほんご e ラーニング みなと」  
教師向けオリジナルコース開講に向けた取り組みー

岡本拓・今井智絵・村上奈未・杉島夏子

## 1. はじめに

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター (以下、JFJA) では、インドネシアの中等教育機関で日本語を教える教師を対象に、教授法が学べる「中等教育日本語の教え方 A2 (ベーシック) 自習コース (インドネシア語: 【Untuk Pengajar】 Pengajaran Bahasa Jepang Pendidikan Tingkat Menengah A2 (Seri Dasar) Kursus Mandiri)」(以下、本コース) を開発し、2022年4月に国際交流基金関西国際センター (以下、KC) が開発・運用する「JF にほんご e ラーニング みなと」(以下、「みなと」) 上で開講した。

中等教育段階の日本語教育の大きな特徴は国家教育カリキュラムに基づいた教育を行うことであり、2013年に大幅改訂された国家教育カリキュラムでは「学習者中心型授業」や「21世紀型スキル」といった従前にはなかった教育の考え方が取り入れられた。しかし、それらを十分に理解しすぐに実践に結びつけることは現場の日本語教師にとって困難なことであった。そのような教師に対する支援の一環として本コースは開発された。

本コースの目的は、インドネシアの日本語教師が学習者中心の考えを知り、学習者が21世紀型スキルを活かして日本語学習に取り組めるような授業の実践方法を学ぶことである。本稿では、コース開発に至った背景や、コースの内容と特徴、開発プロセスについて報告する。

## 2. コース開発に至った背景

本章では、インドネシアの中等教育段階での日本語教育について概要を述べ、コース開発に至った背景について説明する。

### 2.1 インドネシアの中等日本語教育および国家教育カリキュラムの概要と課題

国際交流基金が実施した「2018年度海外日本語教育機関調査」によると、インドネシアの中等教育段階の日本語学習者数は650,215人で、国内の学習者全体の9割以上を占める (国際交流基金 2020a)。日本語科目が中学や高校の第二外国語の選択科目の一つとして位置付けられ、

国家教育カリキュラムに基づいた教育が行われていることが大きな特徴である。2013年に施行された現行のカリキュラムの一つ<sup>①</sup>である Kurikulum 2013 (通称 K13、以下同様に記す) では、人格形成教育重視の観点から学習者が主体的・協働的に学ぶ教育方法が推奨されている (国際交流基金 2020b、古内他 2017)。具体的には、教育文化省が提唱する「科学的アプローチ」、つまり、観察、質問、情報収集・実験、関連付け・情報処理、周囲への伝達を通じた学習者の主体的な学習活動の中で、様々な知識・技能・態度を育成すべきだとされている (松本 2014)。また、学習プロセスの中で創造性・自律性・協調性・連帯・リーダーシップ・共感力・寛容性・生活能力等の資質を向上させる (国際交流基金日本語国際センター 2015) ために、発見学習、プロジェクト型学習、課題解決型学習といった学習モデルも取り入れられている。本報告においては、これらの資質を総称して「21世紀型スキル」、学習者の主体的な学習活動が中心となるように構成された授業を「学習者中心型授業」と呼ぶこととする。

教育文化省は、新カリキュラムを周知・浸透させるため、教師研修やワークショップなどを主催してきた。しかしながら、K13に見られる新しい教育観は、従来のもものと大きく異なる。これまで知識伝達型の教育しか受けてこなかった教師らにとって、学習者中心型授業へと教え方を転換させていくことは容易ではなく、理論的な枠組みの理解だけでは、現場の教師がどのように授業に取り入れたらいいのか分からないという戸惑いの声が上がっていた (エフィ 2016、杉島 2021)。JFJA に派遣された日本語専門家 (以下、専門家) である筆者らにも、新しい国家教育カリキュラムが施行される一方で、それを教師が新しい教育の形として実際の授業に取り入れられていないのではないかという懸念があった。上述した21世紀型スキルは考えや意見を自分の言葉で他者に共有したり、正解のない問題や課題に他者と協力しながら取り組み、解決策を導き出したりすることなどが求められるが、現職の日本語教師自身がそのようなスキルを身につけるための教育を受けたことがないケースがほとんどである。また、教育文化省主催の教師研修等の参加条件は常勤の公務員であることが求められるため、参加できる者がごく一部の教師に限られ、非常勤である多くの日本語教師は、なかなか研修参加の機会を得られないでいる。

## 2.2 コースの開発背景

上述した課題や現状を踏まえ、JFJA では K13に準拠した日本語教科書『にほんご☆キラキラ』 (古内他 2017) を開発したり、新しい教科書を利用した教え方について学べるワークショップを全国各地で行ったりして、中等教育機関の日本語教師支援に注力してきた。

一方で、インドネシアは島嶼国で広域にわたるため、JFJA の専任講師 (以下、講師) や専門家の限られた人数で全国各地へ赴いて対面支援を行うのは非常に困難であった。他に支援が困難な背景として、研修の運営主体が各地の高校教師会であることが挙げられる。JFJA が実

施する教師研修は基本的に各地域の高校教師会との共催で、講師や専門家が出講する形をとっており、研修の企画や運営は教師会の会長をはじめとした役員中心で進められる。しかし、各教師会の規模や活動の頻度や内容は様々であり、共催研修が実施されるかどうかは教師会の企画運営力によるところが大きい。研修実施に至らない地域や教師会の中には新しいカリキュラムや教科書について積極的に学びたい教師もあり、そのような教師からは自分の地域では研修が開催されないことにもどかしさを感じているとの声も聞かれる。

また、研修で期待する成果に対する実施時間の短さも課題である。参加者に一方的に新しい情報を提供するだけの一方通行の研修ではなく、参加者が自己の経験や知識と結びつけて、教師としての学びに繋がられる研修を行うには、集合研修で割ける時間があまりに短いことが課題であった。

そのような背景から、研修参加者が事前に学習できる部分をオンラインコース化すれば、集合研修でよりインタラクティブな活動に時間を充てることができ、より効率的で効果的な研修をデザインできるのではないかと考えた。本コースは、上述のように地理的・人間的に制約が多い上、コロナ禍によってさらに実施困難となった集合研修に代わる教師支援の形として開発されることとなった。

### 3. コースについて

本章では、本コースの概要と構成、学習の進め方について詳しく紹介する。

#### 3.1 コースの概要

コースの目的は、教師が学習者中心の考えを知り、学習者が21世紀型スキルを活かして日本語学習ができるように授業を展開する方法を学ぶことである。コース名称は既出のとおりであるが、「教師が学びの機会を通してさらに輝けるように」との願いを込め、『にほんご☆キラキラ』になぞらえた愛称として「きらめき」とした。日本語レベルに関わらず、インドネシアの教師が誰でも受講できるように、解説言語にはインドネシア語を使用した。コースのレベル表示は、「みなと」のコース制作の規定に従い、A2とした<sup>(2)</sup>。学習時間のめやすは、10時間とした。

#### 3.2 コースの構成

本コースは、モジュール0からモジュール5までの6モジュールで構成されている。さらに、各モジュールは複数のステップ<sup>(3)</sup>からなる。ステップでの学習内容は、図1のとおりである。

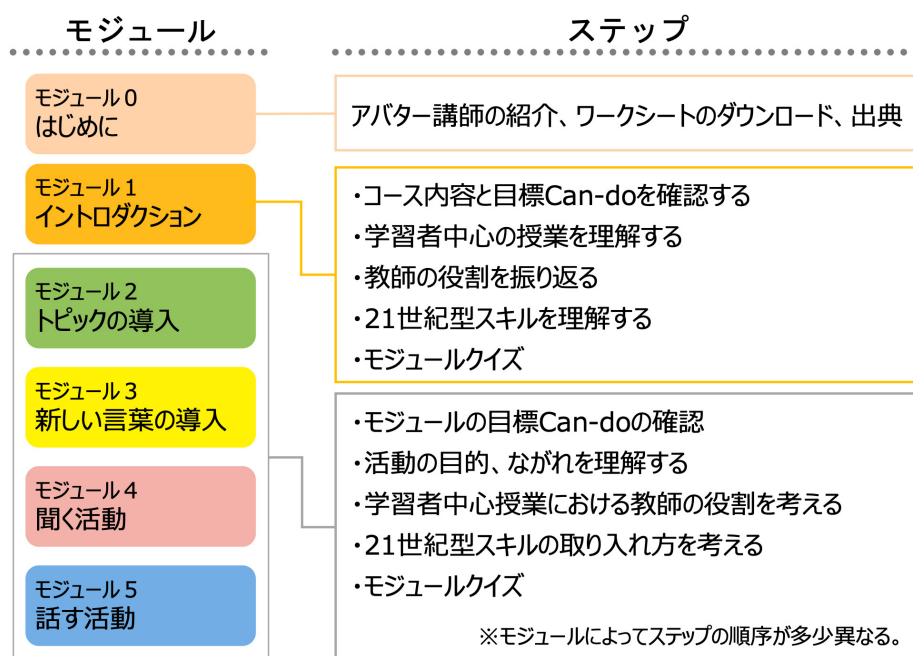


図1 モジュールの構成とステップの学習内容

まず、モジュール0「はじめに」は、コースのナビゲーターである「アバター講師」の紹介動画と出典リスト、コースで使用するワークシートがダウンロードできるステップからなる。「アバター講師」とは、図2のように、教材内の随所に登場するキャラクターのイラストのことである。Baker & Taylor (2012:7) は、よりよいオンラインコース開発のために、インストラクターの個人のビジュアルを用いたアバター等を利用することや受講者を歓迎する動画を作成することが効果的であるとし、オンラインコースにおけるアバターの有用性について述べている。本コースにおいても実在の講師をモデルに、5名のアバターを作成した。モジュールごとに新たに登場するアバター講師が教材の中で問いを投げかけたり、受講者を励ましたりすることで、継続的な学習を促す役割がある。



図2 アバター講師の例

次に、モジュール1「イントロダクション」は、4つのステップ(図3)とモジュールクイズから構成されている。学習者中心の授業とは何かについて簡単に学び、そのような授業で教師はどんな役割ができるかを考えるとともに、21世紀型スキルに関する基本的な情報についても学ぶ。このモジュールの役割は、本コースの軸となる「学習者中心」や「21世紀型スキル」の概念や用語について基本的な理解を促し、以降のモジュールで円滑に学習が進められるように設計した。インドネシアの中等教育機関で教鞭を執る現職の日本語教師には、大学で教員養成課程を修め

## 「中等教育日本語の教え方 A2 (ベーシック) 自習コース」の開発

た者だけでなく、日本での技能実習後日本語教師として高校に採用され、教育学や教授法などを体系的に学んでいない教師も教壇に立っている。このモジュールは、そうした多様な受講者が無理なく学習を進められるようにフォローする役割も果たしている。



図3 モジュール1のステップ (一部抜粋)

そして、モジュール2「トピックの導入」からモジュール5「話す活動」までは、K13準拠の『にほんご☆キラキラ』を使用した授業モデルで提示される「トピックの導入→語彙の導入→受容活動→産出活動」の流れに合わせて同じ順番になるように構成した(図4)。『にほんご☆キラキラ』では、課の活動の名称が「ききましょう」「はなしましょう」などのように日本語で付けられているが、受講者がどの教科書を使用して教えていても戸惑うことのないよう、モジュール名にはそれらの名称を使用せず、一般的な名称(「聞く活動」「話す活動」など)を使用した。

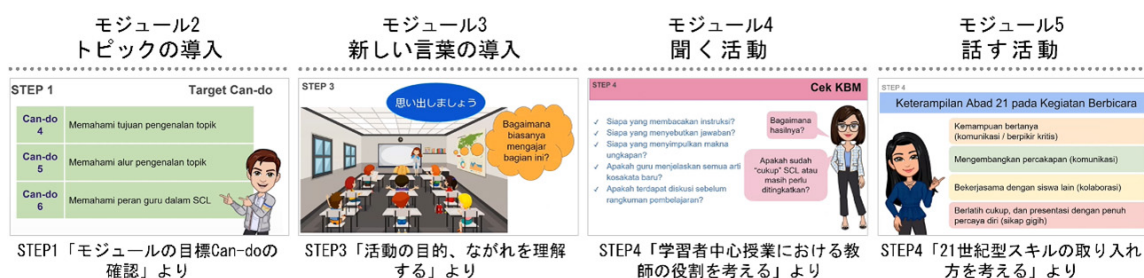


図4 モジュール2～5のステップ例 (一部抜粋)

### 3.3 学習の進め方

本コースでは、受講者である教師自身が新しい学びの形に触れ、それを体験しながら理解していけるようなコースデザインを心がけた。また、教師としての自身の経験や考えをもとに内省を繰り返しながら新カリキュラムについての理解を深められるように構成することで、様々な背景やビリーフを持った教師達に対応できるようにした。さらに、コース内で得た知識や情報をどのように授業に応用できるかについて考える課題を設けた。また、本コースでは受講対

象者であるインドネシアの日本語教師に新しい日本語教授法についてより深い理解や内省を促すことを目的としているため、解説言語にインドネシア語を使用した。教育分野の専門用語を用いる場面では、どんな受講者にも分かりやすいように、一般的な用語に置き換えたり説明を補足したりするなどして配慮した。

学習の進め方として、本コースでは受講者が好きなモジュールを自由に選択して学習が始められる。モジュール0から最後まで順番に進めることはもちろん、例えば、すでにモジュール1の内容を詳しく理解している受講者の場合は、そのモジュールをスキップして次のモジュールから始めることもできる。話す活動の進め方について特に学びたいと思っていれば、先にモジュール5から始めることも可能となっている<sup>(4)</sup>。

## 4. 開発について

本コース開発の特徴は、まず、開発プロジェクトのメンバーとして複数の講師や専門家が関わったこと、そして、コースのプロトタイプを Google Sites 上で公開した後、協力者からのフィードバックをもとにした改良を経て、「みなと」での公開に至ったことが挙げられる。本章では、その開発にあたった人員体制、役割分担、スケジュールをもとに、開発の進め方について報告する。

### 4.1 コース開発体制

本コースの制作には専門家5名、講師5名が携わり、モジュールごとに専門家と講師のペアを組んで制作にあたった。専門家は全員、中等教育支援担当であったが、講師は中等・高等教育担当に加え、コロナ禍で事業が一時縮小された「みなと」講座担当講師や、2020年度日本語パートナーズ（以下、NP）<sup>(5)</sup>派遣が中止となり時間に余裕のあったNP担当講師も参加した。NP担当講師については、中等教育のカウンターパート向けにワークショップ等を実施・支援した経験から現場教師と繋がりがあり、教師の教授力や教え方の課題についてよく知っていると考え、協力を依頼した。また、オンラインプラットフォーム（Google Sites ならびに「みなと」）への教材のアップロードは専門家1名が中心になって担当し、共同作業が必要な時は、他の専門家や講師に協力を求める形をとった。開発プロジェクトのメンバーの中に「みなと」オンラインコースを制作したことがある者がいなかったため、KC主催の「みなと」日本語オンラインコース担当者研修に参加した別の講師にも助言を求めた。このような体制の下、次のスケジュールで開発を進めた（表1）。

表1 開発スケジュール

年 月	手 順
2020年 4月	コースデザイン会議、コンテンツ作成開始
6月	コンテンツ完成、チェック作業
7月	Google Sites への組み込み作業
8月	プロトタイプ版を Google Sites にて公開、運用開始
11月	「みなと」開講へ向けた修正作業開始
12月	協力者へフィードバックを依頼・回収
2021年 1月	「みなと」の開講申請
2月	コンテンツ修正作業開始
5月	テストページ掲載、チェック作業
6月	「みなと」にて「限定公開コース」として開講
2022年 4月	「みなと」にて「教師向けコース」として一般公開

コースデザインには2時間のオンライン会議を2回行い、コースの内容や Can-do を作成し、担当者やスケジュールを決定した。その後、2か月でコンテンツ（動画、ワークシート、クイズ）を作成した。7月から1か月ほどかけてプロトタイプ版を Google Sites 上に組み込み、プロジェクトメンバー同士でチェックを行い公開した。企画から公開までの開発作業は、コロナ禍における在宅勤務期間で行ったため、すべて遠隔で実施した。

プロトタイプ公開後、数か月の運用から受講率やモジュールクイズの結果などが得られた。それをもとに、「みなと」公開に向けた修正に関する会議を2020年11月から翌年5月までの半年間に延べ7回、各回1.5時間程度実施した。初回の会議で「修正する基準が分からない」「どこをどう修正したらいいか情報が少ない」という声が上がったため、2020年12月には協力者を得て本コースに対するフィードバックを依頼することにした。

#### 4.2 協力者からのフィードバック

フィードバックの協力者として、日本語教員養成課程に在籍するインドネシア人大学生に依頼した。大学生に協力を依頼した理由として、コースをじっくり受講してもらえる時間的余裕があり、十分なフィードバックが得られることや、教授経験の少ない大学生がコースの内容を理解できれば、現職の教師も十分に理解できるだろうと考えたからである。2大学の10名に

フィードバックシートを配布し、本コースを受講した後で回答するよう依頼したところ、9名から回答を得た。フィードバックの項目は、モジュールごとに「動画内の文字のサイズや音声は適切か」「学習の流れやウェブサイトのデザインは分かりやすいか」について尋ね、ステップごとに「内容が妥当か」「指示の出し方が適切か」「用語や解説が分かりやすいか」「動画内のイラストや図が効果的か」などについて尋ねた。さらに、コース全体を通して改善すべき点やコメントも求めた。

#### 4.3 「みなと」移行に向けた修正点

プロトタイプから「みなと」への移行に向けて、協力者のフィードバックをもとに修正、変更を行った。表2は、得られた回答の中から主だった指摘をまとめ、分類したものである。

表2 フィードバックの分類

分類	具体的な指摘
①コース全体	・コースマップのようなものを整えて欲しい（モジュールの個数や概要など）
②インドネシア語関連	・指示や説明が分かりにくい ・インドネシア語の誤りや正式ではない言葉がある
③動画教材の音声関連	・ノイズがある ・音声が小さい ・BGMより音声が小さくて説明が聞こえない ・BGMと文字・アニメーションが合っていない ・ナビゲーターによって話すスピードや話し方が異なる
④動画教材のデザイン関連	・字が小さい ・ナビゲーターの発言と動画の言葉が合わない ・音声の説明を改めて動画で見せる必要はない ・動画のデザインがシンプル過ぎる ・モジュールごとにデザインやイラストが違う
⑤学習の進め方関連	・動画内のワークシートの回答のために設けられた時間が長い（動画は一時停止ができるので、考える時間は動画内に不要） ・各ステップの切り替えが遅い（進み方が遅い）

①に関して、コース冒頭に、コース全体を概観し受講者に説明する動画を作成し、ステップに追加した。「みなと」ではすでに全体の構成が明示されているが、より分かりやすくするため、全体像を説明する動画を追加で作成した。②に関して、指摘があったもの以外にも講師間でチェックし合い、分かりやすい指示に修正した。③に関して、録音する際に同じ機材を使用し、さらに音声編集ソフトで音量を調整した。また、BGMが音声と重ならないように配慮した。ナビゲーターの話し方についても、会議で音声を確認し合い、お互いに話し方のアドバイスをしてから録音し直した。④に関して、動画の素材となるスライドは、統一のフォー



マットを作成し、デザインや使用するイラスト、イラストの使用箇所、文字フォントの種類とサイズを統一した。また、スライドに記載するテキストとセリフを合わせたり、長い文章を短く表現したりするなど、分かりやすさに配慮した。⑤に関して、課題を考える時間の直前に動画を切り、課題が終わったら次の動画に進むように方針を設けた。プロトタイプではワークシートの回答のために考える時間を長く取っていたが、「みなど」では10秒以上考える時間を取る場合は、その前後で動画を分けることにした。

フィードバックの中には、動画中の指摘箇所の秒数まで細かく記入してくれるなど、具体的かつ建設的なコメントが多く見られた。そのおかげで修正すべき点が明確になり、制作者全員が納得した上で改修を進めることができたため、第三者からのコメントは大変有意義であった。

今回、大人数が制作にあたったことで生じたであろう指摘もあった。例えば、教材のデザインや各モジュールにおけるナビゲーターの個人差についての指摘は、1人で制作していれば出てこなかったと思われる。その反面、中等教育、高等教育、NPと業務の垣根を越えて複数の担当者が関わったことで得られた効果もあった。各々が担当したワークショップなどの支援業務から得られた受講者層のレディネスやニーズに関する知識や経験を本コースの内容やスク립トの検討の際に活かすことができた。また、JFJAでは以前から人材不足などにより中等教育のワークショップを担当できる人材に限られることが課題であったのだが、本コース制作を通して専門家や他の担当の講師が、学習者数の多い中等教育支援の根幹となる考え方について理解を深めることができたと言える。このように共通の認識を持つことができたのは、大人数が関わったプロジェクトだからこそ得られたことだと考える。

## 5. 本コースの成果

本コースの成果として、これまで学びの機会が得られなかった教師やK13の教え方を学び直したい教師が受講できるようになったほか、本コースを活用してJFJAが実施する教師研修をより効果的な研修にデザインし直すことが可能となった。研修デザイン改善の一例として、2021年に実施した中等教育教師研修の事前課題として本コースを活用し、反転学習に取り入れた実績がある。時間の限られた集合研修の中でインタラクティブな活動により長い時間を割くことが可能となり、参加者が学習者中心の学び方について十分に理解を深める場にすることができた。今後も、本コースを最大限に活用し、研修デザインの幅を広げることができるのではないかと考える。

## 6. おわりに

本稿では、インドネシアの中等日本語教師向けオンライン自習コース「きらめき」開発の背景とプロセス、そして「みなと」でのコース開講に向けた取り組みについて報告した。2020年にJFJAの講師と専門家が協働で制作を開始し、プロトタイプから改良を重ねて2022年ようやく「みなと」で開講することができた。本コースが、これまで学ぶ機会の少なかった教師をはじめ、多くの必要としている方に届くようになることで、変化する環境に対応し続ける支援の体制づくりの一助となることを望んでいる。そして、受講した教師が本コースで得た学びや成長を所属する教師会や地域に還元していくことが、ひいてはインドネシアにおける日本語教育全体の発展に寄与することを願ってやまない。

謝辞：本コースは、JFJAにおけるこれまでの日本語教材の開発やワークショップ等の実績があったからこそこの賜物です。それらを築き上げてこられたJFJAの講師の皆様、過去のインドネシア派遣専門家の皆様、ならびに教材開発にあたって貴重なフィードバックをくださった協力者である大学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

### [注]

- <sup>(1)</sup> 2022年度より2年間はカリキュラム移行期間で、学区や学校の裁量でK13の他に新カリキュラム Kurikulum Merdeka Belajar、K13の簡易版カリキュラムから選択できることになっている。
- <sup>(2)</sup> 本コースはA2レベルの日本語の習得をめざすコースではないが、「みなと」におけるコース制作の規定によるとレベルをB以上にするには解説言語を日本語にする必要があったため、インドネシア語を使用した本コースではA2と設定することになった。
- <sup>(3)</sup> 「ステップ」の定義が本コースと「みなと」の間で異なる。「みなと」のシステム上では学習項目のひとつとまとまりを「ステップ」と定めているが、本コースではそのひとつとまとまりを「モジュール」、その下位のまとまりを「ステップ」と呼ぶ。
- <sup>(4)</sup> ただし、本コースを修了するためには、モジュールクイズ（計5つ）の解答と終了時アンケートの回答で、60%以上を達成しなければならない。
- <sup>(5)</sup> 日本語パートナーズは、アジアの中学・高校などの日本語教師や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや、日本文化の紹介を行う。インドネシアでは中等教育機関に派遣されている。日本語パートナーズ派遣先校の日本語教師を「カウンターパート」と呼ぶ。

### [参考文献]

- エフィ ルシアナ (2016) 「インドネシアの中等教育における日本語教育の発展をふり返って—非母語話者教師と母語話者教師の役割—」『ことばと文字』5、26-35、公益財団法人日本のローマ字社
- 国際交流基金 (2020a) 「海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より」  
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf>>  
(2022年7月17日)
- 国際交流基金 (2020b) 「日本語教育 国・地域別情報 インドネシア (2020年度)」  
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/indonesia.html>>  
(2022年7月17日)
- 国際交流基金日本語国際センター (2015) 『21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育にお

## 「中等教育日本語の教え方 A2（ベーシック）自習コース」の開発

ける日本語教育－各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト－』

<[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/research/five\\_southeast\\_asia/dl/report\\_j.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/research/five_southeast_asia/dl/report_j.pdf)>

(2022年7月17日)

杉島夏子 (2021) 「インドネシア人中等教育日本語教師の変容的学習－みなと「ひろがる」コースを用いた反転型オンラインコースの実践から－」『国際交流基金日本語教育紀要』17、1-15

古内綾子・三本智哉・五十嵐裕佳・八田直美・エフィ ルシアナ (2017) 「インドネシア国家カリキュラム準拠高校教科書『にほんご☆キラキラ』の開発－態度面のコンピテンシーの育成と日本語学習の統合を目指して－」『国際交流基金日本語教育紀要』13、87-100

松本剛次 (2014) 「インドネシアの中等教育改革がめざす「能力（コンピテンシー）」とその育成」『日本語教育』158、97-111

Baker, C & Taylor, S.L. (2012). The Importance of Teaching Presence in an Online Course. Bart, M. (ed.). *Online Student Engagement Tools and Strategies*, pp.6-8. Madison, WI: MAGNA Publications.

<<https://www.facultyfocus.com/wp-content/uploads/2012/01/FF-Online-Student-Engagement-Report.pdf>> (2022年11月14日)